

「国際交流都市日光の再発見—留学生と『まちづくりと観光開発』を考える」プロジェクト

事業代表者 重田康博（国際学部多文化公共圏センター副センター長）

構成員 アンドリュー・ライマン、バーバラ・モリソン（国際学部）

1. 事業の目的・意義

本事業は、「国際交流都市日光の再発見—『まちづくりと観光開発』を留学生と考えるプロジェクト」を実施し、「日光の魅力」を①国際観光開発、②国際交流、③地域づくり、の3つの視点から再発見し、留学生と海外経験のある日本人学生の気づきによる「まちづくりと観光開発」のためのフィールドワーク、シンポジウムを通じて提言を行い、日光に対して国際貢献・地域貢献していくことを目的とした。

日光市には、世界遺産の「日光の社寺」、ラムサール条約登録湿地「奥日光の湿原」をはじめ、日本で唯一、特別史跡と特別天然記念物の二重指定を受けている「日光杉並木街道」、など、世界に誇る雄大な自然と歴史的・文化的遺産がある。また、鬼怒川温泉をはじめ、川治温泉、湯西川・川俣・奥鬼怒温泉郷、奥日光湯元・中禅寺温泉など、恵まれた観光資源を基盤として発展してきた。しかしながら人口減少及び高齢化が進行する山間地域においては、様々なコミュニティ活動が停滞する状況が懸念されている。

今回は「地域おこし」という切り口で留学生とともに日光市が抱える課題を発見し提言を行った。日光市の中でも過疎が進行しているが、地域コミュニティの維持および誘客に躍起になっている栗山地域に焦点を当てた（栗山地域においては高齢化率 44%）。栗山地域には地域おこし協力隊という地域活性化につながる活動の企画や実践を行っている若者が4名いる。彼らの活動を間近で見て、聞いて、体験することで、国際的な目線での提言をしてもらい、シンポジ

ウムを通し地域にフィードバックした。

また、国際交流協会の会員と留学生が共にオリエンテーションやフィールドワークを行うことで、双方が国際的な視点を養うことができるだけでなく、本プロジェクトで学んだことをそれぞれが地域に持ち帰り、在住外国人との地域づくりへつなげる狙いがあった。

2. 研究方法

- (1) 留学生・学生たちが日光市内（東照宮、伝統的家屋の湯西川の町内、過疎地の栗山）において、フィールドワークを実施した。アンケート用紙を作成し留学生・学生によるインタビューを行った。
- (2) 留学生・学生たちは、日光市の連携先との共同作業により、地域の課題・改善点・今後の可能性を検討し、シンポジウムで発表した。
- (3) 留学生・学生たちは、「新しい発見」の内容についてインターネットなどを活用して具体的な提言・提案を行った。

3. 事業の進捗状況

- (1) 「オリエンテーション」12月3日（日）

場所：日光市（場所：日光行政センター）

日光市と学生間で、国際交流都市日光市の魅力と課題を検討し、新しい地域資源・観光資源の可能性などについて共同でオリエンテーションを行った。

- ・プロジェクトの目的を確認（重田）
- ・フィールドワークの説明
 - a. 子ども日光案内人による日光東照宮についてプレゼン

b.湯西川、栗山地域についてプレゼン(活動、湯西川、平家の里の歴史等)(疋野吾一)

- ・グループの目標設定(モリソン)
- ・グループ分け・ワークショップ。



写真1：湯西川水の郷前での全員記念撮影

(2)「フィールドワーク」12月3日(日)、12月10日(日)

学生は国際交流都市日光について紹介を受けつつ、フィールドワークを行いながら、本プロジェクトの調査として、日光の魅力や課題などを関係者にインタビューをした。

「フィールドワーク①」日光東照宮エリア：12月3日(日)午後日光東照宮見学後、5グループに分かれて、インタビュー調査を行い、国際観光都市としての日光を学習し体感した。

「フィールドワーク②」：12月10日

栗山地域の水の郷(道の駅)・湯西川温泉街・平家の里(日本の伝統家屋)等を見学後、この地域で5グループに分かれて、インタビュー調査を行い、過疎地域におけるまちづくりと観光開発について学習した。



写真2：伴弘美氏(湯西川館本館女将)へのインタビュー後留学生と筆者と記念撮影

(3)シンポジウム

12月16日(土)10時—13時 宇都宮大学 大学会館

「国際交流都市日光の再発見」のテーマによるシンポジウムを宇都宮大学大学会館多目的ホールで開催し、日光の地域資源・観光資源について意見交換を行った。参加者は、日光市、セミ学生(アジア、欧米など留学生、海外経験のある留学生)など、約80名が参加した。

プログラムは以下の通りである。第1部では、最初に、疋野吾一氏(日光市栗山地域おこし協力隊)「日光市の栗山地区における地域おこし協力隊の活動と課題」、次に、伴弘美氏(湯西川館本館女将)「日光市の湯西川におけるまちづくりと観光開発」、の2名の講師が講演した。第2部では、宇都宮大学留学生によるプレゼンテーション「日光東照宮と栗山地域の『地域おこし』再発見!」を行った。12月3日に日光・東照宮エリア、12月10日に日光市湯西川エリア(水の郷、温泉街、道の駅、平家の里)のフィールドワークの調査結果を基に、留学生・海外経験のある日本人学生の視点から、国際交流都市日光の魅力、まちづくりと観光開発および課題について発表し、3人のコメンテーターがコメントをした。その後の質疑応答では、国際交流都市日光の新しい地域資源や観光資源の可能性について活発的議論を行い、日光のまちづくりと観光開発について宇都宮大学外国人留学生・海外経験のある学生と共に考えた。

4. 事業の成果

(1)宇都宮大学と日光の共同事業として、日光市が有する地域資源、観光資源の発展について、東照宮や湯西川においてアンケートを行い、外国人留学生・海外経験のある学生などの視点から、国際交流都市日光としてなすべき政策、方法、展望が明らかにした。

(2)今回はで日光プロジェクトは、3年目となり

継続性のあるプログラムになった。留学生・海外経験のある学生が参加し、外国人滞在の増加など国際観光都市を目指す日光の魅力を再発見した。

(2) 日光市が有する地域資源（東照宮、栗山・湯西川など）の発展について、留学生の視点から国際交流都市日光としてなすべき「持続可能な観光開発プラン」の政策、方法、展望を明らかにした。

(3) 留学生、海外経験のある学生などが、世界遺産の東照宮や過疎地域の湯西川などの日本の地域・文化・歴史・観光・過疎・高齢化の現状について一層理解し、日光市国際交流会員、国際学部教員と共に協働作業を行いコミュニケーション力の向上を図った。特に、栗山地域の地域おこし協力隊の疋野吾一さんや湯西川館本館の伴弘美さんからは、過疎地である湯西川、街への観光客の集客、かまくら祭りなどまちおこしのご苦労や課題を聞くことができたのは、留学生にとっても価値のあるお話だったのではないだろうか。

5. 今後の展望

本事業の今後の展望としては、以下の可能性が考えられる。

1 宇都宮大学と日光の継続的な共同事業として可能性

宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター（CPMS）は、これまで日光市国際交流協会による交流事業「食から世界を考える」に協力し、2015年度は国際学部の外国人留学生（比較文化論演習：ライマン教員）、および留学経験日本人学生（卒業研究：渡邊教員）によって、栃木県大学・地域連携プロジェクト支援事業「外国人留学生と留学経験から見る日光の観光開発プラン『世界遺産+1』」を実施し、CPMSと日光市がこれに協力し、2016年度は2016年度は、

宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター/日光市国際交流協会による主催事業として、

「国際交流都市日光の再発見！—学生が考える日光のもう一つの地域発展プラン—」（通称日光プロジェクト）を実施した。本事業の様に、大学と自治体が共同事業として協力し合うことによって、大学の外国人留学生、留学経験がある日本人学生、教員・職員、自治体の職員、会員、商店街や旅館の地元の住民、地域おこし協力隊員と一緒に「顔の見える関係づくり」を行い、地域資源や観光資源を再発見し、提言や提案を行ったことは意義があった。

2 新しい地域と多様なアプローチの検討

今後の事業の可能性としては、日光市での新しい地域や新しいアプローチで事業を展開していくことが考えられる。候補地としては、日光東照宮の商店会の再開発、足尾、奥日光、他の栗山などの地域が考えられる。新しいアプローチとしては、観光開発の他に、環境学習、国際交流、遺跡・国立公園などが考えられ、日光の魅力を再発見できる可能性があり、そこに毎年入れ替わる留学生などの新しい視点や意見を取り入れることは意義があることだ。



写真3：12月16日シンポジウムでの学生の発表
(於宇都宮大学学生会館多目的ホール)